

10-445

25-143

倫理

と宗教

明治
41 11 27
四空

序言

本書は元トト翁の發表したる所説に對し獨乙の倫理協會より發したる質義に更に千八百九十三年翁の答たるものなり

予は茲に一言自らの不文を省みず此書を譯出したる所以を辨するの責あるを信ず

夫れ宗教に對する世人の感情は近來稍回復し來りたるの感ありと雖も我日本に新文明を輸入するに共に一般世人の胸襟を襲ひたるは科學萬能主義にして一

時は宗教とだけ云はゞ迷信の異名の如く感ぜられ一
も二もなく之れを排斥し而して揚言すらく科學は萬
物を説明す宗教の如き陳腐の臆説は吾人既に之れを
要せざるなりと猫も云へば杓子も云ひぬ今日は稍宗
教を求むるの聲生じ來りたりとは云へ猶未だ宗教が
如何なるものなるやを知らず只漠然宗教は吾人の心
の要求に應じ能ふものなりと云ふ位の考を以て之れ
を求むるに過ぎず而も猶一方に於ては前の科學萬能
主義は依然として唱導せらるゝより多數のものは大
ひに迷へる處あるものゝ如し斯くて宗教とは何ぞや

二

てふ問題は提起せられこれが解決を與へんとする書
籍又なきにあらずと雖もト翁が此書簡程直截明瞭に
其意義を闡明したるもの尠なし且つや今日我國教育
者の間に徳教問題に關し大に顧慮する處ありて儒教
を復興せんかなごの説もありと聞きぬ此時に當り彼
等の企てが如何計り効を奏すべき乎を預知するは興
味ある事なるのみならず一方に於て吾人の採るべき
道を教ゆるものたらずんばあらず彼の一世の濁流に
逆て侃々諤々其所信を發表し其迫害を恐れざるト翁
が勇氣の來る處彼れが一個の文人より世界の偉人と

三

なり得たる所以を明にし得べき此書簡は大ひに世の
要求に應じ得べきを信じたればなり

四

日本のチヨボクレ學者の中には科學は觀察と試験と
の上に立つものにして哲學及倫理の如きは人の頭に
よりて製作したるもの宗教は迷妄なれども多數のも
のを支配するの信仰故之れを保存するは社會の爲め
に利なりなと物知り顔するものあり彼等は宗教が人
心の觀察及試験の上に確固たる地盤を有するを知ら
ず彼等の眼は馬の足と猿の頭骨を比較するに適すべ
けんも人の内に心あるを見る能はざるなり彼等には

觀心證悟てふ意義は到底解する能はざるの空言にし
て人心の事實よりは猿猴界に行はるゝ法則實はこれ
人心の觀察したる處のものは確實にして尊き指針た
るべきものなり予は彼等に此書を提供せんとはせず
只彼等によりて未だ毒せられざる具眼の士に公明な
る思慮を煩はさんご欲するなり

ト翁別に宗教とは何ぞやてふ論文ありされども其紙
數之れに倍するのみならず宗教と倫理の關係を明に
するの點に於て又該論文は寧ろ學問的の着色を帯べ
るによりて簡約に其心意を了解する點に於ては寧ろ

五

此書を可なりと信じたるが故に之れを撰みたるなり
譯者元不文其譯文の拙劣にして明瞭なる著者の文を
朦朧たらしめたる點に於ては深く原著者に對し責を
感ずるご共に又讀者の宥恕を乞はざるべからず若し
英語を解する人ならんには直接之れを讀みて其確信
に伴ふ筆致其峻嚴なる理性に應ずる達文其仙骨を帶
びたる短句の中に香ふ餘韻を味はれん事を薦む

四十一年九月

尼崎に於て 譯者誌す

倫理と宗教

津 荷 輔 譯

第一編 宗教

第一章

君は予に問ふに

- (一) 如何に予は宗教を解する乎
- (二) 予が宗教の意義よりして獨立に倫理を支持し能ふ乎を以てす

普通宗教
に與へら
るゝ三個
の定義

第一編 宗教 第一章

予は此要用にして卓越なる問題に對して能ふ限りの力を以て之れに
答へんとす。

三個の異なる意義は宗教に與へらるゝを常とす。

其一は宗教は特別に神より與へられたる默示にして此默示に従ふて
神を禮拜するを云ふ、此定義は既存の或一定の宗教を信する人によ
りて與へらるゝ處にして、其結果として特殊の宗教を以て眞實なる
者とす。

第二は宗教とは或迷信の集合にして其迷信に従ひ迷妄なる禮拜を行
ふものなり、此定義は普通に宗教を信せざるものによりて與へらる
る處のものにして、元より一定の宗教を信するものゝ定義を否定す
るものなり。

第三は宗教は聖賢によりて工夫せられたる道德法と其要綱との集合

にして、普通人を教訓し又彼等の獸慾を制禦し、一般人民を司配す
るに必要なるものなり、此は宗教に自ら關せざるも、政治的機關と
して其必要を認むる體に因て與へらるゝものなり。

第一の定義によれば宗教は確固たる眞理にして、人生の必要上出來
得る限り之れを傳播せざるべからず、第二の定義によれば宗教は迷
信の集合なるが故に、人生幸福の必要上是非之れを脱出する必要を
認むるものとす、第三の定義によれば宗教は必要なる藥劑にして高
等なる教育を受けたるものに對して要なきも、一般人民を教育し且
訓練するに必要なるものなるが故に支持せざるべからず。

第一の定義は音樂に於て或特別なる樂譜を好愛する人の如く、彼は
之れを好む結果として此譜を出來得る丈多くの人に別ち與へん事を
希求するものなり。

第二は音楽なるものを知らぬ人の與る定義にして、彼自の之れを知らざるよりして之れを好まず、音楽は只口喉によりて發する聲或は器具の上に手を觸るゝよりして發する音楽の集合にして、獨り不必要なるのみならず害あるものなれば之れを除去せざるべからずと云ふに似たり。

第三は音楽は進行の曲或は舞踏を教ゆるに必要なものにして、其目的の爲めに是非之れを保存するを要すと云ふに等し。

此凡ての點に於て不完全なる種々の定義の起り來るは音楽てふものの本元的性質を了解せざるより來るものにして、各皆自己の立場よりして之れに對する體度を云ひたるのみ、而して宗教に與ふる定義も亦之れに等し。

第一の定義は定義者の正しく信する處を告白したるもの第二は他人

三個の定義
各々

自の感想
の叙述に
して宗教
の本元の
意義を示
す

の誤り信する處を目撃したる處に従ふて之れを定義したるもの、第三は他人の信するを要すと考へたる處を言明したるなり。凡て此三者の場合に於ては宗教本源の意義を與へずして、各自のこれ宗教なりと考へ信したる處を表明したるに過ぎず、第一の定義は定義者の抱ける信仰を宗教の意義に換置したるもの、第二は他人の抱ける信仰を以て宗教と見做したるより宗教の意義となしたるもの、第三も亦宗教として彼等に供せられたる處のものに代ゆるに他人の信仰を以てしたるものなり。左らば信仰とは何ぞや、何故に人は各自の保てる信仰を固持するや、信仰とは何ぞ、それは如何にして起されたるや。

夫れ如く
斯らの人
自ら信す
主張する
主張する
主を張る
る信得さ
る信得さ
はる信得
は何ぞや

第二章

見学者の淺

今日教育ありと云はれたる多數人の間には、各宗教の本元を以て不可解なる自然現象より起る處の迷信的恐怖より來るものにして此勢力は漸次人化せられ神化せられ遂に信仰の對象となりたるものなりと考ふるもの尠からず、此意見は何等の批評を容れずして多數學者の信する處となりしが、科學者に於ても之れを拒否せざるのみならず彼等の間には強く之を支持するもの、多きを見る、彼のマックス・ミュルラー其他の人の如き時々他に宗教の意義を見出したるもの、起り、其精髓を發揮したるに關はらず彼等は之れに關せざるもの、如く殆んど之れを聞かずして獨り猶宗教は愚蒙なる迷信に外ならずとするもの、如し、程經ざる十九世紀の初の頃なりき最進歩したる

人々(十八世紀末葉の百科全書記者は天主教、露西亞教、併に新教を、否定せり左れども宗教は各自人生の避くべからざる状態なるをいひて拒否せざりき、自然神教のバンナーデン、デセントビヤル、テイデロツト、ラウシヤウ等に就ては暫く言はず、ヴォルテヤーは神の記念碑を建てロベスピヤールは至高者の祭壇を建設したり、左れども今日の人は彼の淺薄皮相なるオーギュスト、コントの教に感謝す、(彼は多くの佛人と等しく基督教を天主教と同一視し、天主教を基督教の充全なる顯現と見做したり)彼の常に卑き見解に安せんと熱心せる學者輩は、宗教は人間發展上或一定の時期に起りしものにして今は既に其期を経過して陳腐に屬したる遺殘物なるが故に將來の進歩に對して妨害たるものなりとの教を正しとして拜受せり、彼等の抱持する處によれば人間は其發展上二つの階級を経過したり、宗教時代、

形而上學時代、之れなり而して今日は第三階級たる最高の科學時代に入りたり而して猶人の間に用ひらるゝ宗教の如きは人間精神機關の遺殘物にして、猶久しき以前に於て必要の意義を失ひたる馬の第五指の如きのみと。

又宗教の本源が自然の不可知的勢力によりて招致せられたる、恐怖の念中に存する想像的信仰なりと云へる説は、古代デモクリトスによりて想像せられたる處と等しく、近代の哲學者及宗教歴史家によりて承認せらるゝ處のものなり。

左れども不可視的存在者即最高の存在者或は如此存在者を考ふる事は自然の不可知的勢力に對する恐怖によりて常に出生するものにあらず、即我等の見る彼のソクラテース、デガート、ニュートンの如き高き訓練を経たる尤も進歩したる人々に於ける如く、今日に於ても

超自然的存在者最高存在者を認識する事は決して不可知的なる自然勢力を恐るゝより出發したるものにあらず、如此は決して本元の問題に答へたるものと云ふべからず、彼の不可視なる超自然的存在者の想念を與へたるものは果して何ぞ、若し人雷或は電光を恐怖すると假定せよ、而もそは彼等を雷とし電光として恐怖するに止まる、左らば何故に不可見超自然的存在者なるジュピターなる或處に住し而して時々矢を放つ人の如きものを想像するに至りしや、人は死を見る事によりて死を恐る左れども何故に交通し得べき死靈を創造するや、人は雷を避け或は死の恐怖より自ら避けん事を試むるを得べし、而も彼等は彼等の運命一に之れに繋れりと想像する處の永遠にして力あるもの、或は又死人に對して生ける靈を想像すとせば豈これ單に恐怖より來るものとすべけんや、必ず他に或理由を有せずん

宗教は自
然力の自
然より來
るものに
非らず

ばあらず、而して此理由の存する處に明に宗教の中心と呼ぼるゝ處のものは横はるなれ、

且つや凡て宗教的經驗を有したるものは、例令小兒と雖も猶宗教は彼の内に喚起せられたる内部的經驗及自覺より來るものにして、外部の警愕或は物質的現象より來るものにあらざるを悟り、自然の不可知的勢力の恐怖が關する處なきを知るべし、其内部的經驗及自覺とは何ぞや、他なし彼自らの無意義なる事、孤獨なる事、惡なる事之れなり、故に人は觀察と經驗の兩者よりして宗教は不可知的自然勢力の恐怖より生ずる迷信より神々を拜するにあらず、又人の發達の階級に固有なる現象によるにもあらざるを知るべく、而して此れ恐怖にもあらず教育の階級にもあらずして如何なる教育も之れを滅し能はざる全く殊別のものなるを知らざるを得ず、彼の人の自覺

無限の宇宙の中に有限の我の存在と罪(即我凡て爲し能ふべき事又爲さざるべからざる事を爲さずとの自覺)は實に教育の如何に關はらず人の世に存する限り存せざるを得ざる者ならずんばあらず。

彼の子供と同じき階級なる動物的狀態にある人は、只動物性自然の要求によりて生くるを常とすれども、理性的自覺に醒覺したるものに於ては、彼の周圍の人性、其進歩、不可倒、不可避、相倚、有限、又永遠の法則等を感じざる能はず、而して彼自身は宇宙の全部より隔離せられ、死すべき宣告を與へられて無界の空間と無限の時間中に消滅し去るべきもの、而も猶自己の行爲に對しては責任の念存し苦惱の自覺を有す、即彼自らは更に善良なる働を爲し得べきに惡き働を爲したりとの自覺之れなり、理性の人は之れ等を了解するが故に遂に下の如き問題を提起するを禁する能はず、我此瞬間の生涯、

不安定、不確實なる我生命、彼の確固たる無限にして永遠なる宇宙の中に於ける、此不安定の我生涯之れ果して何の意義を有するぞやと、こは眞實なる人生に入りし人の忘るゝ能はざる處の問題なり。

第三章

舒上の問題は凡ての人をして種々之れに答ふるの已むなきに至らしめたり。而して此答案中に宗教の本元は存す、然り宗教の本元は全く我は何故に生存せるや、而して我と我周圍にある無限の宇宙との關係は如何との問題に對する解答に存す。

凡て宗教の形而上學、神に對する教理、世界の本源に對する教理、或は又凡て外部の禮拜、此等は普通に宗教と見做さるれどもこは只

宗教の本元は人生の意義を示すにあ

人世の意義は只三種あるを得べし

宗教存在上の標徴に過ぎず、(而して地理上歴史上人種上の事情によりて異なれり)彼の尤も高等なる宗教より最鄙俗なる宗教に至るまで、其根底に於て人の宇宙に對する關係を確立し或は其最高元因に對する關係を確定せざる宗教とてはあらず、又如何に鄙俗なる宗教に於ても又如何計り精練せられたる宗教に於ても其根據を此關係に措かざる宗教的儀式とてはあらず、凡ての宗教の教理は教祖が人として(從て萬人に共通すべき)宇宙及第一元因に對する關係を思考したる處のものを説述したるに過ぎず。

此關係の説述たるや人種の異同歴史的境遇の差異に應じて種々なるに加へて、人民の先頭に立ち教祖の教義を祖述したる幾百或は幾千の宗教教師によりて解釋せられ、祖述せられ、又曲解せられたるにより、饒多なるものとなりしも、實際に於て人が宇宙或は最高主權

の(宗教)關係を想見すべき只三個の觀念あるのみ、第一は初步なる個人的關係、第二は異教的にして社會的或は家族關係、第三は基督教或は神的關係なりとす、左れども嚴密なる意義に於ては此關係を決定する二個の根本關係あるのみ、即個人的是れ個人の幸福の爲めにするを目的とするものにして、其中には個々或は團體を含む、第二は基督教的此れは人世の目的を以て世に人を生せしめたる神に奉仕する事ありとするものこれなり、前に三區分として擧げたるもの、中第二の社會的關係は只第一の個人的關係の擴張に過ぎず。第一の關係は甚古きものにして、今日猶卑き發達の階級にあるもの間に存し、其根本思想に於て人は自らの動機に従ふて動くものなりとの思考より生ずるものにして、最大なる幸福を獲得せんが爲めに世に生活し其結果他が如何なる不幸を蒙むる可きかを顧慮せざるなり。

個人的意

なり。

此初步的なる關係よりして、古來の鄙教、卑き形式に於ける佛教、老子教、回々教、及び頽敗したる基督教は生じたるなり、(此れ嬰兒の初めに生れ出でたる時の状態にして、古代人間發達の最初の階級にありし異教徒等は此人生觀によりて生息したるにて、現今に於ても道德の粗笨なる野蠻種屬は之れによりて生息するなり)、又此關係よりして、其根元に於て一身の幸福を保存との熱望を有する現今の唯靈論、スピリチュアリズム凡て異教の教ゆる處のト占、又人の如く自らを喜ばしめんとする神々、人の仲裁を爲す處の聖徒、人生地上の幸福を希望して献ぐる處の祈禱、及犠牲凡て皆之れより流れ出づるなり。

社會的意
人の宇宙に對する異教的關係の第二の状態即社會的關係は、次の發達の階級にあるものにして、人生の意義を個人の上に限らざれども、

個人の團體家族の如き、民族、國民、帝國、或は彼の人類教として
 コントの宣布したる一般人民の幸福を目的とする宗教の如き皆之れ
 に屬すべきものなり、人の宇宙に對する此關係に於て、人生の意義
 は個人より家族、民族、國民、帝國等に遷れり、即個人の團體の幸
 福は人間生存の目的なりと思考せられたるものなり、此見解よりし
 て或種の宗教は來れり即家長的、社會的のものにして支那日本の宗
 教或は撰まれたる民族の宗教の如き或は羅馬教、露西亞教、此れは
 普通にクリスト教と云はれつゝあるものにして、オীগアスチンによ
 りて此階級まで引下げられたるものなり、而して又彼の人類教も此
 觀念より産出したるものにて、此範圍に屬す、支那日本の祖先禮拜
 の儀式、羅馬に於ける皇帝禮拜、神と選民との調和を謀らんが爲め
 の猶太宗に於ける饒多なる儀式、戦争の成效或は國家の平安の爲に

基督教的
 意義

する祈の如き、皆此觀念の上に建てられたるものなり。

第三の人生觀、即眞の基督教は凡ての老人は已を得ず自覺する處の
 ものにして、予の考ふる處に依れば人間は現下此時期に入りつゝあ
 り、此階級の中にあるものは人生の意義を個人の中に求めざる同
 時に團體の上にも求めずして、人類の爲めにあらず夫れ自身の爲め
 に宇宙と人類とを生じたる神の聖旨に事ふる事を目的とす、此人生
 觀よりして我等の知れる最高の宗教は來れり、其種子は既にピサコ
 ラス、テラピウテ、エツセネ、埃及教、ベルシヤ教、ブラマ教、佛
 教、老子教、等の最高の思想中に顯はるれども、充分に闡明せられ
 たるは後人によりて擾亂せられざる眞のクリスト教なりとす、古來
 の此觀念より産出せられたる儀式、現今に於てはユニテリアン、宇
 宙神教論者、クエーカー、サーピアンナザレアン、露西亞のドークホ

「ポー」其他合理的基督教と呼ばれたる基督教の形式、及説教讚美會議書籍等は皆此人世觀の宗教的表彰なりとす。

凡て宗教と云はるべき性質を有し又宗教として存在するものは皆此三個の人生觀より出發したるものなり、而して人が彼の動物的境界より出發したる時に於ては是非とも彼の三個の人生觀中其一を選まざるべからず、而して其人が其信仰に合適したる宗教の門を叩くや否やに關らず此處に眞に人々の宗教は存するなり。

第四章

如何なる人と雖も人として理性を有する以上は、彼が生息せる境遇、即宇宙に對して何かの概念を有せざる能はず、此概念なくしては人

は生息するを得ざるなり、此故に人は人が宇宙に對して有し得べき三個の關係を設定し、而して其一或は二、三、を保ちて好憎に關らず之れに従ふ、斯くして世界に於ける人間は其根底に於て宗教を保つ事によりて三種に區別せらるゝなり。

故に今日基督教國にある學者輩の中に常に唱導せらるゝ處の、我等は最早宗教を要せざる程に發達の高度に達したりと云へる高言は、基督教を捨てたるものゝ避け難き、他二種の一、社會或は家族階級の宗教か、或は極初歩なる異教の卑き階級に落下したるなるも、自ら此事實を悟らざるものゝ表彰のみ、宗教なき人即宇宙に對する關係を有せざる者は猶心臓なき人の如し、彼は宗教を持つ事を自覺せざる事人が心臓を有する事を自覺せざるに等し、左れども宗教なくして生息せん事は、心臓なくして生息するよりも猶難からん。

基督教を要せずと云へる者は、識の中卑き宗教に落ちたる者なり

宗教は宇宙に對する關係にして此中に彼れが彼の周圍に對する關係、或は其第一原因たる根本に對する關係を設定す、實に理性的の人は是非とも此關係を有せざるを得ざるなり、左れども諸君は宇宙に對する關係を設定するは宗教の事にあらずして哲學或は科學若し哲學を科學の一部とすれば即廣義に於ける科學の領分なりと云ふならん、我は斯く思はざるなり、我は寧ろ反對に彼の哲學を一部とせる科學が其關係を設定すると云ふが如きは大なる誤にして、今日學者の間に科學と宗教及倫理の混亂を來せる所以は其主因實に此處に存するを思ふなり。

哲學を包容せる科學が宇宙の根元或は無限の宇宙に對する關係を設定し能はざるは、一に只下の理由に存す、即哲學及科學の起り來る以前に於て、既に之れなくしては思想を運用する能はず、又此なく

哲學及科學は人生の意義を示すものにあらず

以上の理由

しては、如何なる種類の人と宇宙との關係をも設定する能はざる處のもの、存在せざるべからざる事之れなり、夫れ人は其行動によりて其方向を見出す事能はず、却て其行動は指示嚮導する處のものによりて成就せらる、如此哲學に於ても或は科學に於ても、其研究に對する精神的努力よりして其嚮導を得る事能はずして、其精神的努力は其嚮導によりて全ふせらるべきものなり、夫れ凡ての精神的努力は既に前に決定せられたる指示によりて成就せらるゝなり、而して眞に此指示を精神的努力の上に與ふる處のものは即宗教なりとす。凡て有名なるプラトンよりシヨペンハウエルに至る哲學者等は宗教によりて彼等に與へられたる此指導に従ひたるものにして、彼等は哲學は臆說并に獨斷を排斥せざるべからずと稱しながら猶已むなく之れに従はざるべからざりしなり。

プラトーン及其後繼者の哲學は異教的哲學にして、彼等は個人或は國家の中に存する團體の爲めに最大幸福を得べき道を考究したるなり、彼の中世記に於ける教會的チャーチ基督教徒クリスチャンも亦等しき人生の概念概念よりして個人の救拯及未來の個人的最大幸福を得べき道を講じたるなり、而して只此神政政治の追求よりして社會の幸福に對する預備を爲したるなり。

近世哲學中ヘゲル、及コントは、其根底に於て人生の意義を國家社會的宗教の見地に於けるものなり、而して厭世哲學者シヨペンハウエル、及ハルトマンは猶太的宗教シユデオの形質的世界觀レリヂョウを離れんとして遂に佛教の根基を探るに至りしものなり。

哲學は古今共に宗教の設定したる人と宇宙の關係より生じ來る結果的探究にして、宗教が其地盤を設定するにあらずんば哲學の働くべ

哲學は宗教を要求す

き立場は存せざるなり。

此の如く狹義に於ける實驗科學に於ても亦等し、科學は人と宇宙の或關係の設定せられたる結果として、如此對象及現象を探究するもの又せしものにして此關係ありて研究の必要は現はる。

科學は現在或は將來に於ても、科學者が眞實に想像するが如く萬物を研究するものにあらず、(それは到底不可能の事なり、如何となれば宇宙には研究せらるべきもの、數限りもなく存在すればなり)、唯宗教が此筭なき客體、現象及事態、中より必要の度に應じて順次に之れを撰擇して試験せしむるなり、此故に科學とは唯一不可分のものにあらず、宗教の多きに從ひて科學に種々あり、各宗教は研究すべき對象を撰擇す、故に時代及人種の異なるに從ひ、宗教の影響を蒙り其觀察點よりして物體を研究す。

今日クリスト教の名の下に社會に榮へ、中世に於て復興せられたる異邦的科學は、人の最大幸福を獲得し得べき性を供へたる、凡ての現象を研究するに止まる。佛敎及プラマ敎の哲學的科學は、彼を壓迫する處の苦痛より如何にせば免れ得べきやと其事態を研究するなり、ヒブリーユ科學タルマツドは、彼等選民が其召を保たんが爲め、神となしたる契約を完ふせんが爲めに考究すべき事態の説述及研究に過ぎず、教會的基督敎徒の科學は、如何にすれば人は救はるべきかとの様態の研究にして、眞のクリスチャンの科學は、今新に生れたるもの、如く、如何にすれば彼の來りし至高の意志を知り、又之れを人生に應用し得べきかとの事態の研究に外ならず。哲學も科學も人の宇宙の關係を設立する事能はず、此關係は既に哲學或は科學の始まれる以前に於て既に設定せらるべきものなればな

哲學及
人及
科學
の
意義
が
示
さ
る
理
由
は
他
の
に
は
な
ら
ず

り、而して彼等が之れを爲し得ざる猶他に一の理由あり、即哲學を一部とせる科學は、探究者の位置、或は彼が經驗せる感覺を離れて、智識的に現象を研究せんとす、然るに人の宇宙に對する關係は智識のみによりて研究せらるべきものにあらずして、感情も亦之れに關し、**精神力全體の調和**によりて初めて得らるべきものなればなり、汝等如何に眞に存在すべきものは觀念なりと云ひ、或は凡てのものは極微分子によりて成立すと云ひ、生命の本元は物質或は意志なりと云ひ、彼の熱、光、電氣の動力は同一勢力の異種の顯現に過ぎずと種々之れを立證するも、單に知力によりては、彼の感じ、苦み、喜び、恐れ、或は望む、存立者に對しては、彼れの宇宙の位置を説示するに足らず、其位置從て彼が宇宙に對する關係は、(宇宙汝が爲めに供はれり故に汝が能ふ丈の力を用ひて汝の生涯の爲めに之れを

用ひよ、或は汝は神に愛し選ばれたる民なれば、神の要求し給ふ如く國民を愛し、其國民と共に獲能ふ最大の幸福を享受せよ、或は汝は汝を其事業に任じたる事業を爲さしめんが爲めに、汝を世に遣したる、最高存立者たる意志の機械たるに過ぎず、故に其意志を知りて之れを成就せよ、汝の全力を以て汝の究竟を爲せと教ゆる宗教に懸れり。

第五章

夫れ哲學及科學書を了解せんが故には研究の準備を要す、左れども宗教に對しては如此ものを要せず、宗教的概念は例令愚にして無智なる人と雖も皆與へられたり。

人が彼の周圍或は其元因に對する關係を知るは、哲學的或は科學的の知識を要せず、(其知識の饒多なるは自覺に對する躊躇を來たして却て重荷たるなり)、只例令瞬間たりとも、彼の福音書にも教ゆる如く、子供或は卑き人の屢遭遇するが如く世の煩惱を棄却し、物質の無意義なる事を感じ、又尤も眞面目なる事を要するのみ、是れ下等の教育なき人々の、屢明瞭なる自覺を以て平易に崇高なるクリストの人生觀を了解すれども、彼の學者輩は往々之れを享受する事能はずして鄙教中に逡巡するを見る所以なり。

例令ば彼の多くの教育ある人々は、伶俐にして學者なりしシヨウペンハウルの人生は苦痛を離れて個人的幸福を増進するにありとしたりし如く、或は又神の祝福により聖典の方法によりて、救を得る事を以て人生の意義としたる、彼の博學なる監督の如き、人生の意義

を以て個人的幸福にありとする位置にあるもの多きに、殆んど無學の露西亞教の信徒たる百姓等は、彼の思考力を煩す事もなく、彼の世界の大神と呼ばれたる、エビクテータス、マーカスアレリウス、セ子カ等によりて洞觀せられたる、人は神の子にして神の意志の器具なりとの、人生の意義を洞視せるにあらずや。

左らば諸君は問はん、此哲學にもあらず科學にもあらざる知識の本源は何ぞやと、若しそが哲學的ならず科學的ならずんば何なるかと、此答に對して予は只下の如く答ふるの外はあらず、凡ての知識を載せ、凡ての知識に先つ處の此宗教的知識は、我等之れを定義する能はず、そは吾人はこれを定義すべき途を有せざればなり、此知識を稱して神學に默示と稱せり、若し此默示たる字に異様の意味を付加せずんば此用語は實に其意を得たり、此知識は學術によりて得られ

宗教的
心の
精髄
に
啓示
なり

ず、或は又一人或は數人の勉力によりても得られず、左れども之れを無限の智慧として奉戴せる、數人或は一人の勉力によりて漸次に人間に啓示せらる。

何故に一萬年の昔に於て個人に限られざりし人生の意義は了解せられざりしや、何故に或一定の時に於て一層高き人生の意義は(即家族的國民的帝國的の人生觀は了解せらるゝに至りしや、何故に歴史的紀念の中に基督教の人生觀は被はるゝに至りしや、何故に特に此人間に隠れて彼の人間に顯はるゝか、何故に或時に於て彼方式に顯はれずして此形式に顯はるゝ乎、此等の問題に答へんとして歴史的意義時の關係、事情、生涯、人格、或は又最初の設定者の特性等を以て之れに答へんとするは、恰も何故に旭日は他に達する前に或者を照すかてふ問題に答ふるが如し、真理の太陽は漸次に昇騰して次第

に廣く、凡てを照すに至れり、而して最初に或物に反射したるは、其光の最初に達して而して之れを反射するに尤も適當なりしが爲めのみ。

此真理の光を受くるに尤適當なる性質は、心の特別なる能動的なる性質に因するにあらずして、却て心情の受動的なるに因するを常とす、尤も罕には世の煩惱の棄却、物質的の無意義の自覺と、最大なる眞面目とを以てしたる宗教の始祖、(彼等は、大抵哲學或は科學の大知識にはあざざりし)の例を我等に示したる如く、偉大なる研究的知識に一致する事あり。

我考ふる處に於て首なる誤にして、眞正なるクリスト教の人類間に於ける發達を妨ぐるものは、他に勝りて科學者にして(今彼等はモローの位に座す)中世文學勃興時代に再興せられたる人生の卑き觀察を

啓示を受
くべき心
意状態は
受動的な

科學の自
儘に決定
は遂に彼
等を送る
より遠め
りしめた

以て彼等を導き、眞に荒廢せられたるものを以てクリスト教の本元なりとし、クリスト教は既に陳腐に屬したるものなりと決定し、自ら(實は之れ眞に陳腐に屬したるもの)卑き國家的人生觀を以て最も高尚なる人生觀なりと主張して、強て人を粘着せしむるに存す、彼等は此觀察點に固執するによりて最高度に達したる人生觀なるクリスト教を了解せざるのみならず、之れを了解せんとも務めざるなり。此誤謬の主なる元因は科學者の、彼等の科學と基督教の一致せざるよりして袖を分ちたるに因し、而して其誤謬は彼等の科學にあらずしてクリスト教にありと決定したるが爲めなり、換言すれば眞實ならぬゴクリスト教以後千八百年に起りし科學は、既に現今社會の大部分を感化したりと信するを喜べりと云ふにあり、然れども實は基督教は科學より千八百年遅れて起りしものなり。

如此役割の轉倒して驚くべき事實は來れり、それは宗教倫理等の眞に必要な事或は生命の本源等に對する概念の混亂せられたる事、科學者よりも甚しきものは世になき事これなり而して猶これよりも更に驚くべきは眞に科學は物質の現象を研究する事に大なる成效を贏ち得たるに關らず人生の指導に對して何等の價值をも示さざるのみならず、却て實際に於て人生を害するものあるの事實なりとす、此故に予は人生の宇宙に對する關係を設定するものは科學或は哲學にあらずして何れの時に於ても宗教なる事を確信するなり。

斯く貴下の問へる第一の問題予は宗教なる語を以て如何なるものとする乎に對して、予は宗教とは人が彼自身と永遠限なき宇宙或は其源その第一元因との間に設定したる或關係なりと答ふべし。

第二編 倫理

第一章

此第一の問題の答案よりして第二の答案は自然に生じ來るべし。

若し宗教にして人世の意義を決定する處の關係、人が宇宙に對して設定したる關係ならんには、倫理は人が宇宙に對して抱ける彼或は之れの關係より自然に生じ來る人の行爲の指示或は説述なりとす、而して如此根本的關係は若し異教的、社會的關係を以て個人主義の擴張に過ぎずとせば二種となり、若しこれを區別すれば三種となる事を既に云へり、而して之れによりて倫理に三種の教を生ず、即元始的野蠻的なる個人道德、鄙教的、家族的、國家或は社會的道德、

三個の宗教に對して三種の道徳は生れ來る

其二

而して基督教的の神或は人に奉事する神的道德之れなり。
此關係の第一よりして凡ての邪教に普通なる、其根本に於て個々別々なる獨立體の幸福を追求する處の道德的教訓は流れ來る、隨て獨立體の最大幸福を産すべき凡ての状態は決定せられ、而して如此幸福を掌握すべき道を指示せらる、此關係よりして異教は生じたり、彼の最下級の狀態にあるエピキュリアン此世と後の世に於て粗野なる個人的幸福を約する處の回々教の道德、教會的基督教的の救拯を目的とする道德上の教訓、これ格別に未來世界の個人幸福を希ふもの、而して又世界的實利主義者の道德、只此世に於ての平安を目的とするもの、此等は皆此關係より流出するものなり、又此同一の教訓よりして個人的平安を目的とし隨て個人の艱難より脱れんとする未熟なる狀態にある佛教の道德、及厭世主義者の浮世的教儀等は來れり。

其二

第二の世界に對する異教的關係、即人生の目的を獨立體の集合團體の平安を確保するに置けるよりして、此集合體を支持する事は之れ人生の目的なりと思はれたる處の團體に各自の奉仕する事を要求する道德的教訓は生じ來る、此教訓に従へば個人の幸福は人生の宗教的基礎を構成する全人民の幸福に一致し能ふ範圍に於て承認せらる、此關係よりして熟知せられたる羅馬希臘及支那の道德的教訓は來れり、彼等は常に社會の爲めに個人を犠牲とす、又これよりして選民の爲めに各自の服従を教ゆる猶太教的の道德、又今日の教會的の道德、國家的道德、即國家の善の爲めに個人の犠牲を要求する處のもの、又其家族の幸福殊に其子供の爲めに一身を犠牲にする處の婦人の道德は生じ來れり、凡ての古代及中世并に近世歴史に亘りて此國家、家族、或は社會道德的行爲の記述は充滿せり、而して今日の人民の

多くは彼等がクリスチャンなりと自稱したるが故にクリスチャンなりと思へど、實は此階級の道徳を保持したるものにして、世の多くは之れを理想として其子孫を教育せり。

第三自らを以て其目的を遂げんとする最高意志の機械なりと思意する基督教關係よりして、人の最高の意志に依據する處を疏明し、且つ其要求を決定する處の、此の人生觀に一致したる道徳は流れ出づ、人の宇宙に對する此關係よりして凡て最高の道徳的教訓は來れり、彼等の最高の顯現に於けるビサゴリアン、ストイック、佛教、波羅門教、道教、而して真正の意義に於ける基督教、即人の個人的意志を捨つる事を命ずる、否獨り個人的幸福のみならず家庭社會國家の幸福をも、我等を生物として此世に送りし彼れの意志我等の良心に因て啓示せらるゝ意志を成就せん爲めに棄つる事を命ずる處のもの

其三

之れなり。

第一第二第三の無限の宇宙或は其根元に對する關係よりして、彼等は如何なる道徳を口に説き或は如何に見られんと彼等の希望するに關らず其眞の道徳は此より流れ來る、彼の吾人の宇宙に對する關係を以て、個人の最大幸福を掌握するにありと思意する處の人は、口に如何に人類國家社會家族等の爲めに生存すべき事或は神の意志を成就せん爲めに生息すべしと論ずとも、又如何に巧妙に人を欺き得たりとても猶常に彼が動機は只彼自身の平安を求むるが爲のみに存す、此故に其孰れを撰むべき乎、神の意志を成就せん爲乎、家族或は國家の爲乎、或は又自らの平安かの選擇に遭遇せば彼は家族國家或は神の意志を成さずして、却て自らの爲めに凡て彼等を犠牲とすべし、彼は個人的幸福の上に人生の意義を認めたるが故に此人生觀

を變化する時の來るにあらざるよりは、彼は其他を成し能はざるなり、此と同じく多く婦人の場合に於て見る如く、人生を以て家族に奉仕するにありとするもの、或又民族國民政治上の争亂の時に於ける或は壓迫せられたる國民の間に起る人々の如き(に仕ふるにありとするものは、如何に基督教信者なりと彼の告白するにもせよ其道徳たるや基督教的にあらずして國民的宗教的たるを脱かれず、故に一方に於ては家族或は社會の平安と、一方に於ては個人的平安、或は神の意志を成就する事との間に衝突の生じたる場合に於ては、彼は彼が生存する目的即其人生の觀察點に一致すべき團體の服事を選ぶの已を得ざるに至るべく、實に彼は如此にして人生を完したりと感すべし、而して此と同じく人生の意義を以て彼を此世に送りたるもの、意志を成就するにありと思意する處のものは、如何に個人的或

は家族國民帝國或は人類の爲めに、最高意志……此れによりて其意志を告知せんが爲めに人に興へられし理性と愛情……に反對せん事を説得するも、彼を此世に送りし意志に従ふを妨げらるゝよりは寧ろ凡ての人生の羈絆を常に犠牲に供すべし、此れ彼は如此従順の中に人生の意味を曉ればなり。

第二章

道徳は宗教を離れて存立すべからず、それは只宗教の結果なるが故のみにあらず、……即人の宇宙に對する關係の結果なるのみにはあらず、……道徳は宗教の中に含まれたればなり、凡ての宗教は(我生活の意義は何ぞや)との問に對する答たり、而して宗教的答案は既に其

中に人生の意義に必然附随し來る處の道德的要求を含めり、人生の意義は何ぞやとの問題に對しての答案は、人生の意味は吾人の幸福の中にあり故に汝の及ぶ限りを以て汝を利せよ、或は人生の意義は人の集合團體の中にあり故に汝の力を用ひて之れに事へよ、或は人生の意義は汝を送りし主の意志を遂行するに存す故に汝の力を用ひて其意志を知り而して之れを遂行すべしと云ふにあり。

此答案は下の如く云ひ換へらる汝の生活の意義は汝の快樂の中にあり、此れ人の生存の目的たればなり、或は人生の意義は汝が其中の一員なりと思せられたる團體に奉仕する事に存すこれ汝の運命なり、或は人生の意義は神に奉仕する事に存すこは汝の定數なればなりと。

道德は宗教が與ふる彼の人生の意義の説述中に包含せらるゝものな

るが故に宗教より區別すべからず、此眞なるは非基督教哲學者の其哲學中より最高の道德を誘導し來らんと務むる事實よりして殊に明にするを得べし、如斯哲學者は基督教道德の人生に必須なるものにして是なくしては吾人の生存すべからざるを認むると共に既に世に存する事實なるを認め、彼等の非基督教哲學に之れを付加すべき道を發見せん事を望み、何者かを之れに付加して彼等の鄙教的社會的哲學よりして之れを産したるが如く見せしめん事を望む、之れ彼等の務むる處なりと雖も彼等の苦心は他よりも更に明に基督教道德は鄙教哲學に對して全く獨立なるのみならず彼の個人幸福主義、或は個人的苦痛離脱主義、或は社會幸福主義、の如き哲學に對し矛盾衝突するものなる事を現はせり、

我等の人生觀に符合する處の基督教倫理は、人の個人性を團體の爲

めに犠牲にする事を要求するに止まらず、神に奉事せんが爲めには個人性及其團體をも棄る事を承認す、左れども鄙教哲學は只個人の幸福或は個人の團體に對する最大の幸福を得べき道を講究するものなるが故に其反對は遂に避くべからず、而して此反對を隱被すべき只一の道あり、即抽象的概念を疊々堆積して形而上學の朦朧たる領域を保つ事是れなり。

これ即中世文學復興時代後の哲學者の多くなしたる處なり、而して此鄙教の根據の上に立てる哲學と基督教道徳の要求との一致すべからざる事情の爲めに、驚くべく不眞實、不明瞭、非知識的なる性質を興へ、且人生に何等の關係なき近世哲學を構成するに至れり、只此中に算すべからざるはスピノザ(彼は自を基督教者なりと思はざりしに關はらず眞正なる基督教の根本より發展したるものなり)、カン

ト(此れ天才の人彼は形而上學に依憑せずして倫理の系統を論ずる事を可としたり)にして其他の哲學者は、皆彼の光榮あるシヨペンハウエルに至るまで彼等の形而上學と彼等の倫理の間に人工的關係を工夫したるなり。

基督教倫理は豫め承認せられざるべからざる者を有す、彼は哲學によらずして確然として立ち之れを支持すべき假偽なる支柱を要せず、哲學は此倫理より反抗を受けざらんが爲めに或命題を工夫したるが如く思はる、如此命題は只抽象的に思考せらるゝ時に於てクリスト教倫理に合するを得るのみにして、此れが實際生活に適用せらるゝに至らば單に結果なきのみならず、直ちに其哲學的基礎と我等の道徳と考ふる處の者との間に強き矛盾衝突を來すなり。

近來有名となりし不幸なるニーチエーは此矛盾を曝露する事により

て尊き務を爲したり、彼は現今の非基督教の見地よりして道徳法を論ずるに當り其虚偽にして無意味なるを云ひ、而してこれよりも更に理論的にして愉快に且つ幸福なるは人の爲めに超人スーパーメンを設け、而して此等に至るべき階段として此れに仕ふるもの、一員たらんよりは自らを其一員とするにありと云ふの已を得ざるに至らしめたる事これなり、人生の鄙教的觀察點の上に基を有する哲學的組織に於ては彼の社會彼の家族彼自身の幸福を得べき道を知り、或は之れを認めたる時に於ても、此等の幸福を省みずして他の幸福(自らには望ましからぬ又識認し難き、而して微小なる人力にては到底獲得し難かるべき)の爲めに活くる事の一層利益にして賢明なる事を證し得るものなし、人生の幸福てふ範圍を以て人生の意義とし、其上に建設せられたる哲學は人は各瞬間に死すべきものにして彼れの希望を棄つべ

きを知り、從て彼には可なるが故に望ましく又確として疑ひなき彼の幸福をも省ざる理性の人に對して何の建言をも爲し能はざるべし、彼の理性の人が其幸福を棄つるは決して他人に對して或確なる幸福あるが故にあらず、(そは彼は彼自身を犠牲にする事によりて幾何の事を爲し能ふべき乎を知らざるが故なり)只これ正道にして善なるが故のみ之れ無上大法なりとす。

夫れ凡ての人の同一なる事……他の生活を蹂躪して他を己に仕へしむるよりも己を犠牲にして他に仕ふる事の可なる事……を證せんことを欲せば、鄙教哲學の觀察點よりしては得べからずして宇宙に對する彼の關係を新にせざるべからず、即人生の意義は彼を遣したる神の意義を只遂行する處にのみ存し、人の位置に對して撰擇の自由を有せざる事を確認し、而して彼を送りし神の意志とは人に事へんが爲

めに己の生涯を献ぐるにある事を知らざるべからず、如此宇宙に對する關係の變化は一に只宗教より來るものとす。

第三章

斯く基督教道徳を鄙教的科學の根本位置と調和し或は演繹せんと試むるとも、如此詭辨或は思想の奸策は能く此單純にして明白なる位置を没する事能はず、即今日凡ての科學の根本に横はる處の進化の法則は一般永久的にして且不變なる法則則生存競争適者生存の上に置かる、故に彼及彼の團體の平安を得んが爲めには彼と彼の團體を適者たらしめざるべからずして、他は亡ぶとも彼及彼の團體の亡びざらんが爲めに適者たらしむる様務めざるべからず。

此法則の理論的結果と、此れを人生に適用するよりして驚かされたる博物學者等は如何に言葉を以て事實を被はんとし、又此法則を精整せんと欲するも、其努力は却て彼の全有機體の生命を司配し從て人間を一の動物と見做す處の法則の拒み難きを明にするのみ。

予が此論文を草せんとして以來露西亞譯なるハックスレー氏の或英國の集會に於て進化と倫理とふ問題に付て話されたる一書出でたり、此書に於て學者なる教授は……我々の能く知れる大學教授ベケットフ其他多くの此問題に對して筆を執りたる人々の、其先輩等と同じく不成功に終りし如く……生存競争の法則は道徳を破るものにあらずして、生活の根本的法則として生存競争を承認すると同時に道徳も存し得べしと云ふに止まらず共に進歩し得べき事を証せんと試みたり、氏の書は古代の宗教及哲學の一般的觀察と、種々なる諧謔詩句

等に充ち爲めに華麗なれども非常に努力せずんば其根本的思想に到達し得ざる程に複雑となりたり、されども氏の思想は下の如し進化の法則は道徳法に反して流る此れ古代希臘及印度人によりて知られたる處、此故に此國民は宗教及哲學を自己棄却の教理に至らしめたり、著者は思へらく此教理は正しからず著者の宇宙法則と稱する一の法則存し此法則に従ひて凡てのものは互に競争し而して適者のみ生存す人も亦此法則に支配せられ而して今あるが如きものとなれり左れども此法則は道徳法に反して流る、左らば如何に之を調和し能ふ乎、即下の如く成就するを得べし彼の宇宙的過程を停止せんとする社會進化の法則存す、而してこは適者の生存するにはあらずして只道徳的最上なるもの、生存するを目的とする道徳的過程の之れに更れるにありと。

ハックスレー氏は何處より此道徳的過程の生れ來りしかを説明せず、左れども第二十の脚註に云へらく、此過程の根基は一方に於て人は動物の如く共同の生活に入り其結果として團體を害する彼等の性質を壓迫し、他方に於て團體の會員は社會的幸福に反するものに向ひて強き逼迫行動を興るに由ると、ハックスレー氏は此過程が彼等の會員たる團體の保存の爲めに彼等の性情を抑制するの餘儀なきと、若し彼等が此團體の秩序を紊亂するに於ては罰せらるゝの恐怖よりして、其存在を氏が明瞭にせんと欲せし處の道徳的法則は供せられたりと云へり。又氏には英國人社會の繼紹たる彼の淳朴なる精神により、今日存在する愛蘭問題に對しても……即下等社會の貧困、富者の愚なる奢侈、阿片及酒精の貿易、其死刑、其政治、或は貿易の爲めよりして種族の剿絶、或は殺戮、其隠れたる惡其偽善、……政

綱に反せざる處のものこそ倫理的法則に導かれつゝある道德的の人なりと見へたり。彼は社會の中に生存する人の性質が社會の保存上必要な性質なる事を忘却せり、そは猶盜賊の團體が其一員たる盜賊の性質を必要とするが如く、我々の社會に於ても死刑執行者、獄丁、判官、兵卒、又偽善なる僧侶の性質等に對する必要を見る、左れども此等の性質は道德に何等關係なきなり。

道德は絶へず成長發展するものなるが故に或社會的法則に一致す而してハックスレー氏が間接に道德の機械として論及したる所刑臺或は斧によりて之れを保護せんとするは之を支持するの道にあらざるのみならず道德に反するものなり、而して之れに反して、多くの現行法則に反する事は獨り道德に反せざるのみならず寧ろこれが表章としては已を得ざるなり。

火を以て
火を消す
能はず

其友を食ふべからざるを悟り其意に従て動く處の喰人種は彼の社會よりすれば其法規に反すものなり、故に不道德なる社會に反する行為は決して不道義なるものにあらず、大抵道德の界限を擴張せんとする眞の道德的行為は常に社會的行為に反するものなるは争ふべからず、是故に彼等の團體の全きを保せんが爲めに彼等の個人的利益を犠牲にせずんば其法規に一致し能はざる法律出でたらんには此法律は獨り道德律ならざるのみならず凡ての倫理に反する處の法律たるなり、而して此法律たるや彼の生存競争の法則と同一なるものにして只隠微なる形態を有するのみ、此只一個人の上に於ける生存競争を團體の上に移したるのみ、如此は争を止むるにあらずして猶一層強き一撃を與へんとして其腕を後方に振りたるが如きのみ、若し生存競争適者生存の法則が凡ての生物に對する不死の法則なら

ば、(此の如きは只人間を以て一の動物なりと考ふる時にのみ許容せらるべきもの)社會の法則と之れより流れ出でたるか、或は何處より流れ出でたるかを何人も知らざる倫理法との間に面倒なる争論なく、若し必要の生じ来るあらば之れを蹂躪し能ふべきにあらずや、若しハックスレー氏の吾人に證したるが如く社會の進歩は團體の中に人民を蒐集して而して後國民民族或は夫等の家族の間に生存競争の繼續するものならば此競争は道德ならざるのみならず我等が實際生活に於て目撃する如く各個人の間^{に於けるよりも更に不道德にして寧ろ残忍なるものなり。}

第四章

社會萬能
主義を破す

我等は其不可能なるを思へど假りに茲に一千年の後只社會の進歩によりて全人類の一團となり一國一民を形成したりと想像せよ、左らば(國と民との間に廢されたる競争の人と動物との間に繼續し競争絶ゆる事なく即クリスト教道德の可能を全く驅逐する處の活動の殘留すべきは云はずとするも)、此合同を爲したる個人間の競争家族の間、民族と國民との間の競争は減少せずして、我等が個人家族種屬及國家の集合に於て見るが如く新らしき形式に於て繼續すべし、家族のものは他人の間に於けるが如く争ひ而して屢一層激しく闘ふ、國家に於ても亦等し一國の内に生活する人民の間に於ても他國民と競争するが如く競争す、只そが同一の形式に於て行はれざるのみ或場合に於ては殺戮は刃と矢によりてせらるゝも他の場合に於ては饑餓を以てせらるゝ、斯くして家族と國家の内に弱きもの残りたりともそは

社會的共同的爲めにしかるにあらずして家族及國家の内の人の間に愛と犠牲の存在したるが爲めに然るなり、若し家族を有せざる二人の子供の適者のみ生存し同時に善き母を有する家族の小兒の二人共に成長したりとて、ユハ家族に繋がり居りしが爲めに生存し得たるにあらずして其母の愛と献身によるなり、社會的進歩の道德を産する事を證せんとするは、恰も煖爐の組織が熱を産するを證するが如し、熱は太陽より來る、而して(此太陽の働によりてなりたる)燃料をストーブに與ふる時は熱は生ず、如此道德は宗教より來る、特別なる生涯の特別なる形式に於て道德を生ずるは只宗教的感化(之れ即道德なり)の彼等に與へられたるより生ず。煖爐は熱せられ而して暖を與へ、或は熱せられずして冷ゆ、如此社會も道德を含有し或は社會の上に道德的感化を與へ或は道德を發輝

せずして社會に對し何等の感化をも留めざるを得。

基督教道德は人生の邪教的或は社會的觀察の上に置かるゝ能はず、而して又哲學或は非基督教科學より演繹せらるゝ事能はず、獨り演繹せられざるのみならず共に一致する能はず、

こは凡て嚴肅にして確固なる哲學及科學者の既に了解せる處の事にして、彼等は合理的に若し我等の提議にして道德に符合せずんば道德の爲めに更に惡しと言へり左れども彼等は猶其研究を繼續せり、宗教より出でざる倫理書或は世俗的問答書は出版せられ人々を教ゆ、人は此等の人生を指導すべきを想像す、そは彼等が常に有する處の宗教によりて導かるゝが故に實は此等の著書によりて導かるゝにあらずれども只斯く見ゆるのみ、斯くて此等著書も自然に宗教より來りしものゝ如く擬せらる。

彼の世俗的道義の如き宗教々理の上に立たざるものは、音楽を知らざるもの、既に音楽を學び之れに熟練したる音樂師等の前に立ちて其嚮導として手を振るに類す、音樂は樂師等の以前嚮導者より學しが故に各自の音調によりて暫時は繼續すべしと雖も、此音樂に無智なるもの、棒を振る事は只に不必要なるのみならず時の進行と共に樂師等を混雜ならしめ遂に音楽をして不規律ならしむるが如し、此れと同一なる混雜は今日人々の心に起り初めぬ、人を教へんとして、高き宗教に基かざる導師等によりて造られたる道徳を教へんとするの結果は、同一の混雜を起せり、實に既に人工的基督教によりて一部の混雜は來りつゝあり。

誠に迷信を混せざる道徳的教訓を得る事は望ましき事なり、左れどもそが夫れを含有するは道徳が宗教即宇宙或は神に對する人の保て

る關係より來りたるが爲めなり、若し我等此關係の説述を迷信なりとして好まずんば其事實を明にし明瞭に適確に且つ合理的に之れを説述するを務むるか、或は今不充分となりし人の以前の宇宙的關係を仆して之れに代るべき一層高く、一層明瞭に、一層合理的なるものを以てすべし、左れども吾人は世俗的非基督教的と呼べる、處の詭辯の上に建てられたるものを工風すべきにあらず、これ何の基礎をも有せざればなり。

宗教を離れて道徳を建てんとするは、恰も子供の自ら愛する花を移植せんとする時に爲すが如く、彼の好まざる而して無用と見ゆる根を斷ちて根なきものを地に植ゆるが如し、眞の宗教的根底を有せざる眞實にして眞面目なる道徳とはあらず、そは猶根のなき處に眞實の花の出でざるが如し。

夫れ斯くの如く予は貴下の二間に答へて、宗教は人によりて設定せられたる、各個人の間と無限の宇宙或は其本源に對する關係にして、倫理は此關係より生ずる處の人生常住の指導なりと云ふを以て之れに應へん。

宗教と倫理終

明治四十一年十一月十日印刷
明治四十一年十一月二十日發行
廿一日



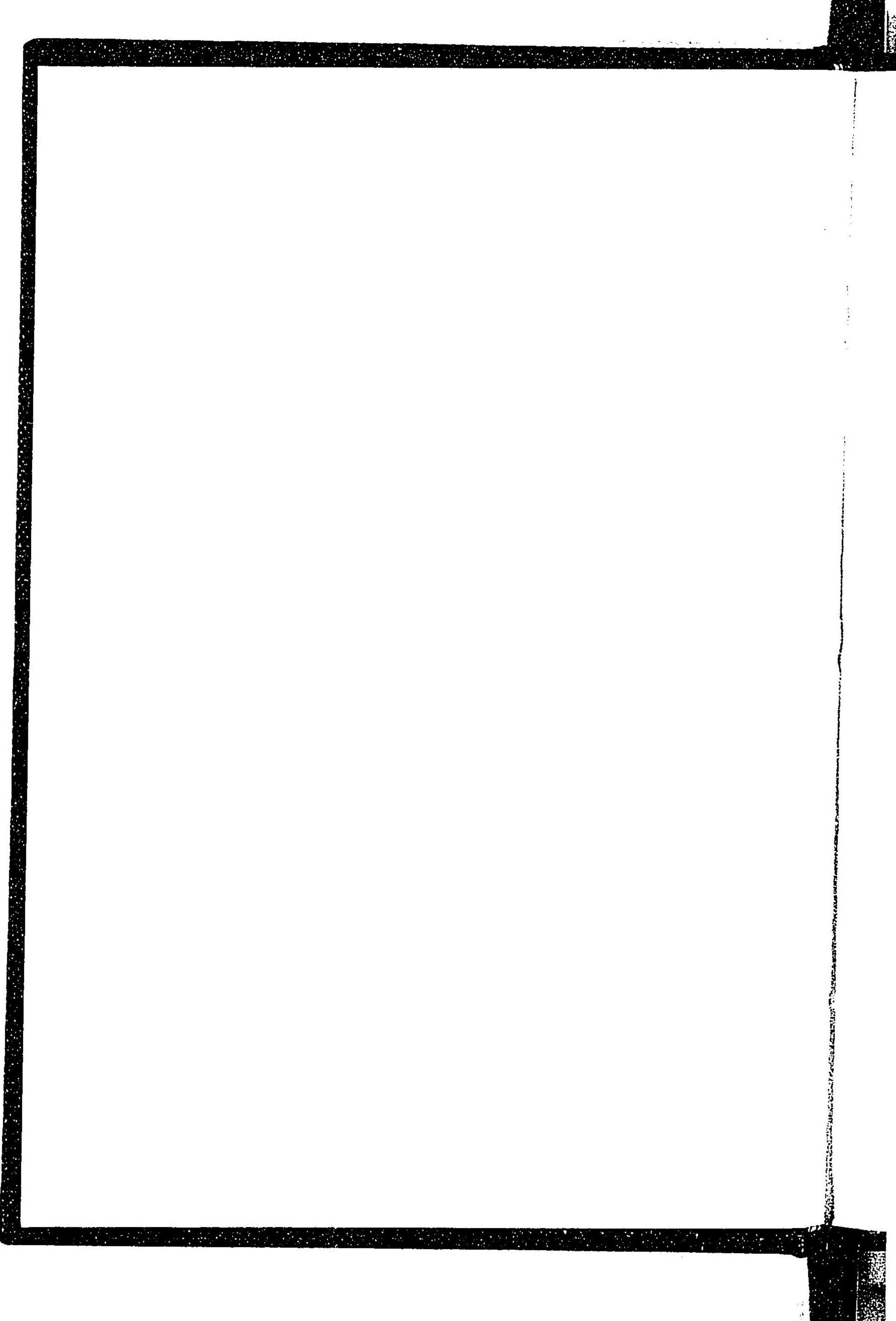
譯者 津 荷 輔

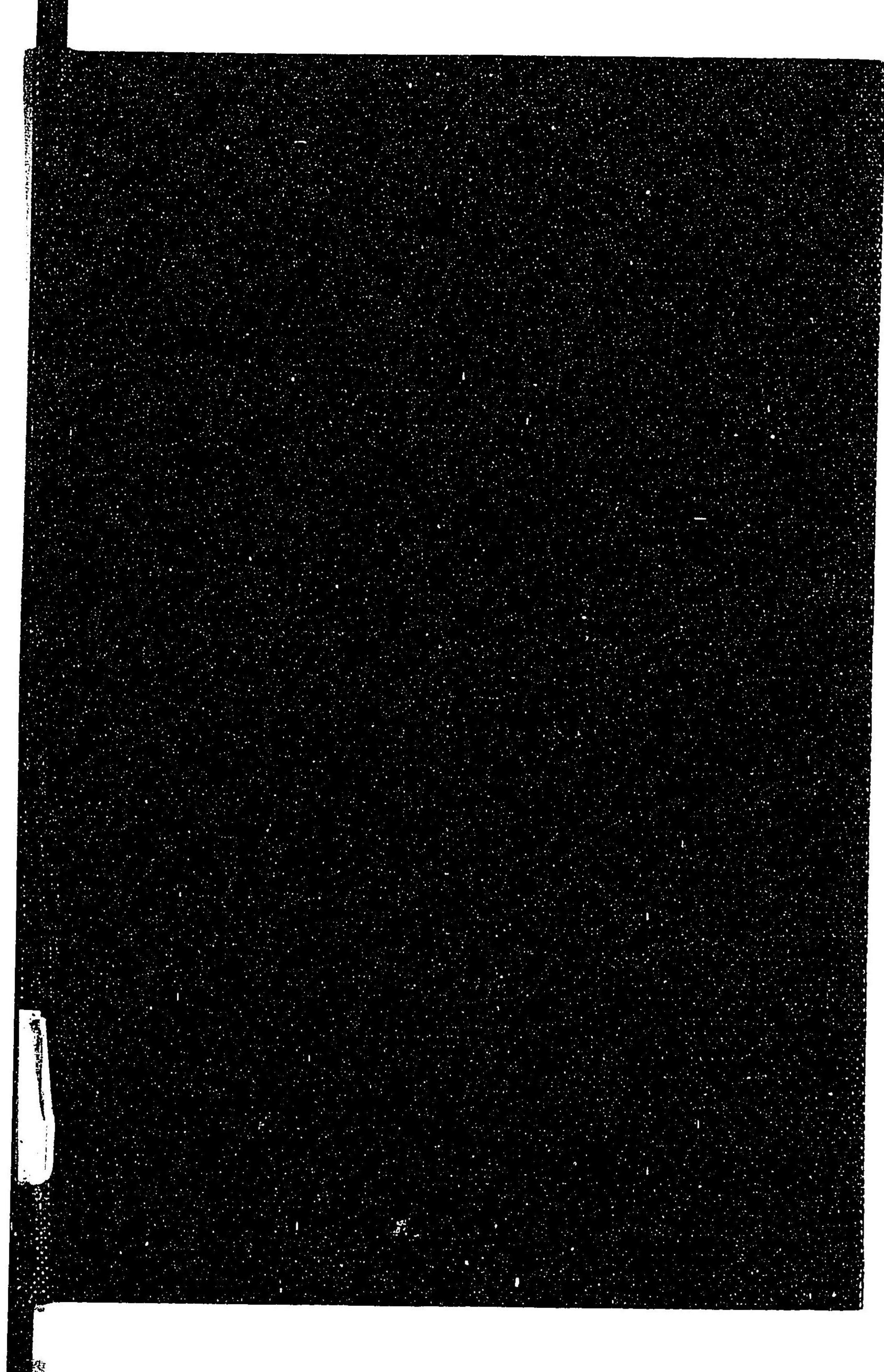
發行者 東京市京橋區尾張町三丁目十五番地 福永文之助

印刷者 横濱市太田町五丁目八十七番地 村岡平吉

發行所 東京市京橋區尾張町三丁目十五番地 警醒社書店

印刷所 電話新橋一五八七 振替貯金口座三三番 横濱市山下町八十一番地 福音印刷合資會社





25
743

013783-000-6

25-743

倫理と宗教

トルストイ/著

M41

ABA-0273



